平成30年1月30日

調　査・研　修　報　告　書（会派個人用）

会派名：　きずな　　報告者：林　　高正

実施場所：東京都大田区　「こども食堂」 気まぐれ　八百屋　だんだん	実施日：平成30年1月25日

■目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状　など）

全国的に「こども食堂」なるものが各地に開設されていますが、元祖というか、こども食堂と銘打った初めての「こども食堂」をどういう思いから立ち上げたのか聞きたかったのが第一の目的です。それも、八百屋であるというのが非常に気になりました。

■参考とすべき事項

代表の近藤博子さんとお話して感じたことは、「何も変わったことをしているつもりはない」というものです。元々が歯科衛生士ですから、食に対する思いは強いものがありました。そこで、食の素材そのものにも関心が向き、無農薬野菜を販売する八百屋をやり始められたのだそうです。こども食堂を開くきっかけは、地元の小学校の校長先生とのお話で、「お母さんが病気などで、朝ご飯・晩ご飯がバナナしか食べられない子供がいるんです」と聞いたことだったそうです。

近藤さんは生まれが島根県出雲地方で、どうも、地域で育てられたという記憶が原風景かとも思います。だから、自然体で子供やお母さんたちやお年寄りに接しておられるのだと理解しました。「だんだん」は、出雲弁で、「ありがとう」なんですね。

彼女は、こども食堂よりも、「気まぐれ八百屋　だんだん」で本当はやっているのだと言いたかったのではと思います。ここは決して「こどもの食堂」ではないと何度もお話されていました。要は、貧困家庭からの脱却とか、そんな言葉は必要ないというメッセージを彼女は私達に伝えたかったのだと思います。

■提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など）

高齢者のための「サロン活動」が各市で開催されていますが、「気まぐれ八百屋　だんだん」では、あらゆる人たちがやってきます。子育ての悩みを相談するグループ、学習の面倒をみるグループ、場所を借りたいけどというグループ等、ありとあらゆる人たちから相談が来るのだそうです。毎週月曜日の夜は、大人の「ほっとする居酒屋」の日まであります。ですから、1月（つき）の予定を立てるのが大変みたいで、提出した資料の「1月の予定」をご覧頂ければ、ご理解いただけると思います。現在の場所は以前、居酒屋だったそうで、居抜きで借りたので調理場がついてきたということだそうです。そのことが結果として、子ども食堂に繋がったことも事実であり、飲食を伴ったプログラムができることで、交流の輪が広がっているのだと感じました。

表現するなら、公的なものであれば公民館になるのでしょうが、行政とは一線を画すというか、近藤さんの思いでやりたいということから、私的な集会所、「気まぐれ八百屋　だんだん」が出来上がってきたのではないでしょうか。何気なく、「ふらっと」立ち寄れる場、隠れ家的な場所があれば、楽しくなりますよね。

※ 調査・研修終了後、一週間以内に会派事務局へ提出してください。

平成 30 年 1 月 30 日

調 査・研 修 報 告 書（会派個人用）

会派名： きずな　　**報告者**：徳永泰臣

実施場所：こども食堂「気まぐれ八百屋だんだん」	実施日：平成 30 年 1 月 25 日

■目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状　など）

○地域のコミュニティ八百屋「だんだん」で食へのこだわりを通じて地域コミュニティを拡げる活動をされている、近藤博子さんにお会いしました。だんだんとは近藤さんの出身地、出雲地方の方言で「ありがとう」という意味で、それを店名にされたとの事でありました。近藤さんは長年歯科衛生士として働いてこられ、そうして携わった仕事の中で強く感じた事、人が生活する上で最も重要な事は「食」であると感じ、その後自ら安心できる食材を提供したいとの思いから、無農薬野菜と自然食品のお店を始められ、開店当初から地域の拠点になるようなお店を目指され、それが「こども食堂」へとつながったとお聞きしました。

■参考とすべき事項

○だんだんの願いは、違いがあっていいじゃない。違いがあるから、おもしろい。違いがあるから、進歩できる。ひとりの手では、何もできないけれど、みんなの手をつなげば大きなパワーとなり何かができる。そして、みんなが笑顔になる。「だんだん」は、そう信じている。ひとりは、みんなのために、みんなは、ひとりのために、全てに感謝して日々を生きていきたいと願って活動されている。

■提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など）

○こども食堂は「貧困対策とみられると、誰でも来づらくなる。子供も大人も皆が来られる店になった時、自然と支援が必要な子も来てくれる。いろいろな子供がいて、色々な大人がいる。それぞれの存在が受け入れられる居場所になれば」との思いで行っておられる。そういった配慮が行政も私達も必要ではないかと思う。

※ 調査・研修終了後、一週間以内に会派事務局へ提出してください。

2018年　1月30日

調　査・研　修　報　告　書（会派個人用）

会派名：　きずな　　**報告者：**　五島　誠

実施場所：きまぐれ八百屋だんだん	実施日：2018年1月25日

■目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状　など）

こども食堂
子育て支援のワンストップサービスについて

■参考とすべき事項

・「孤食」でいる子供達へ地域の大人が寄り添う場としてのこども食堂
・運営されているスタッフはすべてボランティア。口コミなどで「私も何かお手伝いしたい」との思いで集まった主婦の方が中心。子供、大人関係なく誰が食べに来てもいい地域のコミュニティの場。食堂だけでなくワンコイン寺子屋や手話カフェ、哲学教室など様座な事業を行っている。子育て支援などをされる他の団体の情報も多く集まっており、子育てプラットホームの側面もある。
・現在日本各地でこども食堂が開かれているが、その「こども食堂」を最初に名づけ活動を始めたきまぐれ八百屋だんだん。今増えてきているこども食堂の違和感もお聞きする事が出来た。自治体から予算を出させるのが目的になってはいないか、大人の都合で子供のためと綺麗なパッケージを作って活動されていないか。役所や政治家はこういった事業でお茶を濁すのではなく、子育てや教育環境について一生懸命取り組んで欲しい。本当に子育てしやすい社会や地域を作らなければならない。私たちは私たちの出来る事を精一杯行うのだ。ともおっしゃった。

■提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など）

・パッケージにとらわれず、本市の子供達へ必要な施策を実行していかなければならない。子供の貧困の課題についても正面から向き合って行政が出来る事を遂行していく。本当に子育てしやすいまちについて調査、議論、改善、実行していくこと。
・民間の方々が、思いによって実行しやすい環境づくり。

※ 調査・研修終了後、一週間以内に会派事務局へ提出してください。

平成３０年１月30日

調 査・研 修 報 告 書（会派個人用）

会派名：きずな　　**報告者**：桂藤 和夫

実施場所：「気まぐれ八百屋 だんだん」（東京都大田区　東急池上線 蓮沼駅前）	実施日：平成３０年１月２５日㈭

■目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状　など）

・ 昨年末、民放の TV 番組でヒロミ・滝沢秀明さんがリフォームする場面が放映されたのでご覧になった方もあると存じますが、店長 近藤博子さんが歯科衛生士として働かれる中で、人が生活する上で最も重要なことが『食』だと強く感じられ、2008 年に無農薬野菜と自然食品のお店を出店され、その後、こども食堂やワンコイン寺子屋など様々な活動をしておられるということで、本市でも、世代を超えた団欒の場を作れないだろうか？という思いで、現地視察に行かせていただきました。

■参考とすべき事項

◇こども食堂「だんだん」は小学生～高校生までのみんなの居場所と位置づけられ、女性の自主的な集まりの中で運営され、現在では国からの助成金等も出ているが、それに拘らず公的な援助は一切受けずに寄付金（善意）で運営され、持ち出し（赤字）も仕方がないと思ってワンコイン（大人だけ 500 円）やっておられた。

◇「だんだん」では貧困の連鎖を断ち切るために子供たちがどんな状況でも安心して勉強できる環境を作ってあげて、その上で頑張った子供たちが社会へ出た時、非正規雇用ではなく正規雇用になる、といったような生きていける社会づくりが大事であり、それが皆さんのお仕事ではないかと言われたこと。

◇こども食堂は 17:30～20:00 開かれ、子供たちが誘い合って入りにくい暖簾をくぐって来てくれるような居場所づくりをされ、「みんなで食べると美味しいよ！心もほんわか、身体も元気になるよ！」をキャッチフレーズに子供から高齢者までの三世代の団欒を地域全体で作り上げようとされていたこと。

◇イジメ、不登校等の問題を真剣に考えるべきで、「だんだん」では相談や休息に来やすい雰囲気づくりをされていたが、そういうことは民間が作るべきだと言われたこと。
その他、ひとり親家庭などへのお裾分けやお知らせ、案内パンフなども置いてあり、ここでは解決できないこともいっぱいあるし、時代の変化や経済状況が違っているのでいろんなネットワークを構築されており、カフェ・レストラン、民間型の文化センターとしての顔や各種教室など多様に活用されていた。高齢化社会もみんないずれ行く道だから、人がたくさん集まる場所をたくさん作っていけばそこに何かが生まれるはずであると言われていたこと。

■提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など）

・本市は少子高齢化の進展、社会構造の急激な変化も相まって厳しい状況下にあり、人それぞれに抱えている事はあると思うが、様々な課題と真摯に向き合い、共助・互助の精神で寄り添い合いながら生きていく地域社会を構築するために「こども食堂」のような拠点作りをしていく必要があるのではないかと強く感じた。